病児保育協議会
NEWS
一般社団法人 全国病児保育協議会ホームページ http://www.byoujihoiku.net/
第80号
2015年（平成27年）10月1日
〔発行人〕　会長 稲見 誠
〔発　行〕一般社団法人 全国病児保育協議会
〒154-0002 東京都世田谷区下馬 3-10-7 いなみ小児科内
TEL.03-3421-4885　FAX.03-3411-4936

第25回 全国病児保育研究大会 in くまもと 大会特集号

第25回 全国病児保育研究大会 in くまもとを開催して

第25回 全国病児保育研究大会 in くまもと 会頭　杉 野 茂 人

平成27年７月19日、20日に熊本市のくまもと森都心プラザ及びホテルニューオータニ熊本を会場に全国病児保育研究大会を、無事に開催することができました。地方大会ではありましたが全国より900名近くの皆様にご参加いただき、貴重なご講演、有意義なご発表、活発な討議で各会場は大変盛り上がっていたようです。ご参加いただいた皆様には厚く感謝申し上げます。

今回は、記念すべき第25回大会ということで、２年前稲見会長がわざわざ熊本までお越しいただき、熊本での開催を打診された時は、私達で開催できるのだろうか？と不安で一杯でした。稲見会長はその時「これからは協議会が認定する病児保育専門士が協議会やこの大会の運営をリードしていかなくてはならない」と熱く語られました。私が所属している病児保育室は単独型で昨年から全国病児保育協議会の副会長をしている永野が病児保育専門士として室長を担っています。「分かりました。病児保育士が中心になって！それならやってみましょう」と受けることにしました。直ちに立ち上げた実行委員会では、熊本ですでに認定を受けている８人の病児保育専門士にリーダーシップを発揮して頂き、私と実行委員長の北野先生が補佐をするような形で、２年間喧々諤々の議論をしながら準備をしてきました。テーマは「病児保育の輪を広げよう～子どもも親もよか笑顔～」としました。この４半世紀に全国病児保育協議会が培ってきた“正しい”病児保育の輪をさらに広げていこうという気持ちが込められています。

実行委員会では、本研究大会の伝統的な部分はきちんと継承して、そのうえで熊本らしさを出して、特別講演や教育講演もできるだけ地域色を意識して準備することにしました。特別講演では、今や全国区というより世界的に有名になったくまモンを育てた熊本県庁の成尾様にご講演いただき、くまモンも登場してみんなでくまモン体操もしました。教育講演では今後の病児保育のあり方を考えるとき避けて通れない、障がい児や発達障がい児をどこまでどのようにみていくのか、という問題提起ができたと思います。また第５回目となり定着してきた感染症セミナーでは感染症の基礎から免疫学、ワクチンから感染症対策まで３人の講師の先生に大変勉強になるご講演を頂きました。その他ワークショップでは種々のテーマで様々な討議がなされました。

以上のように、今大会では講演は会頭講演･基調講演･行政説明・特別講演・教育講演３題の７題あり、基礎研修、ステップアップ研修、感染症セミナー、各委員会、ワークショップ９つ、一般演題30、ランチョンセミナー３会場という概要で、昨年の東京大会よりややコンパクトにしました。特に２日目はランチョンセミナーを入れず、例年より早く閉会とし、少しでも熊本の観光をしていただきたいと考えました。

大会当日はいくつかの小さなトラブルはありましたが、全体にスムーズに運営できたと思います。配布資料が足りないことが時々あったようです。コンパクトなコピー機が近くにあると便利だったのかなと反省しています。初日の懇親会では全国から熊本においでいただいたので、より多くの方と一緒に熊本の美味しい食事と美味しいお酒を楽しんでいただきたく、ホテル側と交渉してできるだけ多くの方に参加していただけるようにしました。懇親会の場で全国の方々と病児保育に関する様々な情報交換ができるのも、本研究大会の魅力の１つかなと思います。以上今大会を振り返っての感想です。

来年は新潟で第26回大会が、そして平成29年は大阪で本研究大会が開催される予定です。両大会が素晴らしい大会になりますよう期待いたします。

最後に、本大会の開催のためにご尽力をいただいた北野昭人実行委員長、実行委員としてまた当日現場でスタッフとしてご協力いただいた熊本県内７か所の病児保育室の小児科医・保育士・看護師の皆様、ボランティアとして働いて頂いた熊本YMCA学院の学生の皆様、そして、いつも困った時に支えていただいた協議会本部・理事の皆様、協賛や寄付をいただきました企業の方々に深謝いたします。

会頭講演

「病児保育と関わって考えること」を拝聴して

報告者／座長：佐藤　勇（よいこの小児科さとう 病児保育室よいこのもり）
講師：杉野　茂人（杉野クリニック みるく病児保育室）

「会頭講演と言われると困るけれど、病児保育に関われば関わるほど、言いたいことが沢山出てきますよ」１年前の東京大会の際に、翌年の熊本大会準備のご苦労をねぎらった際にうかがった杉野先生のお言葉でした。今回の会頭講演は、その「予言」通り、正直で素直な杉野先生のお人柄を表すようなご講演でした。

杉野先生は、単独型の病児保育室「みるく」の設立にかかわり、「みるく」と一緒に病児保育を考え成長してきたとおっしゃられます。控えめな杉野先生ですが、小児科医としてのベースは、元々のご専門だった小児神経領域の研究と診療によって培われたようです。筋ジストロフィーの遺伝子診断を研究領域とされ、臨床面でもそういったお子さんたちと関わり、小児の在宅医療などが一般的ではなかった時代に、すでに実践されていました。「生きにくさ」をもった子どもたちに小児科医として出来ることを提供する、この考え方は、まさに病児保育マインドにつながるものだと思いました。

先生のお話をうかがっていると、病児保育の現場では、保育士、看護師が主体となって、協議会が提唱する「病児保育専門士」を育成し、小児科医は後ろでしっかり支える役割を果たそうと提唱されています。これも杉野先生らしさを感じることが出来ます。

ご講演の中で、熊本の水道水が地下水でまかなわれていることを紹介されました。会場の「くまもと森都心プラザ」２階には、観光・郷土情報センターがあり、ウォーターライフを提唱する熊本市の水事情が紹介されていました。事前にそこで予習できた私は、「山に降った雨は、時間をかけて何年か後に、美味しい水となって帰ってくる。」というたとえを、子育て支援のあり方になぞらえた先生の含蓄あるお話しがとてもすんなり受けいれることが出来ました。

先生の「思い」がつたわるすばらしいご講演でした。ありがとうございました。

行政説明

病児保育事業・子育て支援新制度について

報告者／座長：稲見　誠（全国病児保育協議会 会長）
演者：朝川　知昭（厚生労働省雇用均等 児童家庭局保育課長）

朝川　知昭様は平成２年の厚生労働省に入省され、昨年７月に橋本前保育課長の後任として保育課長に就任されました。内閣府子ども子育て会議でも厚生労働省の代表として、病児保育事業の発展に尽くして頂いています。

さて、講演内容ですが、本年４月より施行された子ども子育て支援新制度の意義・概要の説明でした。本支援制度の意義は、これまで財政支援の対象外であった少人数の保育にたいして小規模保育事業を創設、地域独自の取り組みを支援するために地域子ども子育て支援事業の創設（病児保育事業が含まれる）、保育所を増設して待機児童の解消を図る、職員配置の改善と処遇改善を実現させる、認定こども園の二重行政の是正などが骨子となっています。これらの仕組みは、消費税率の引き上げによる安定財源により質の高い教育・保育を提供するもであり、財源のしっかりしたシステムの中に病児保育事業も組み込まれました。消費税率は10%に引き上げられませんでしたが、病児保育事業に関するものは予定通り量の拡大と質向上に関する予算がついています。

病児保育事業では、地域の保育園などの質の向上につながる活動を評価して基本部分の助成金の改善を行い、また病児保育施設の施設整備や改修に対する補助金の制度も充実させました。長期的には、現在病児保育施設利用者延べ利用者57万人を、2020年には利用者を延べ150万人まで増加させるよう病児保育施設の拡充に努めていきます。

以上、行政説明の報告をいたします。

特別講演

100年後も愛されるキャラクターを目指して

報告者／座長：杉野　茂人（第25回 全国病児保育研究大会 in くまもと 会頭）
演者：成尾　雅貴（熊本県商工観光労働部観光経済交流局くまもとブランド推進課課長）
（NPO法人チャイルドケアサポートみるく 理事）

大会初日の午後に開催された特別講演は、いまや世界的に有名になった「くまモン」とともに日本中いや世界中を飛び回っておられる成尾　雅貴様にご講演をいただきました。２年前に本大会を熊本で開催することが決まった時、すぐに「成尾様にくまモンの話をしてもらおう」という声が出ましたが、２年後もまだくまモンいるかなあ？ふなっしーに負けてないかなあ？という不安もありました。しかし、そのような不安は全く必要ありませんでした。２年どころではない100年後も愛されるキャラクターとしての道を確実に歩んでいることが紹介されました。以下、成尾氏の講演より抜粋。

くまモンの誕生は2011年（平成23年）九州新幹線全線開業に先駆けて熊本県で「新幹線元年委員会」が発足し、この委員会が小山薫堂氏にアドバイザー依頼し「くまもとサプライズ」というキャッチフレーズが生まれ、そのロゴとして提案されたのが水野学氏デザインの「くまモン」いうことになる。その後皆様ご存知の通り、ゆるキャラとしての認知度はあっという間に拡がり平成23年11月ゆるキャラグランプリ2011で優勝すると「熊本県営業部長 兼 しあわせ部長」の肩書きをいかんなく発揮し、熊本の情報発信に大活躍しているのである。平成22年８月には大阪の関空祭りに県外初出動し、平成26年７月には秋田県への出動で全

都道府県訪モン達成。海外も平成23年５月の韓国を初めとして、中国、台湾、香港、シンガポールに続き平成25年には仏・独・英・米国を訪問。また、タイ、インドネシアにも訪問している。「くまモン」の様々な活動は経済効果だけではなく、熊本の地域ブランド力を様々な視点で引き上げていることが調査で明らかになっている。「くまモン」のこれからは３つの行動規範つまり、１）Surprise（サプライズ）：常に新しいことにチャレンジ、２）Story（ストーリー）：一過性の打ち上げ花火は慎み活動全体のストーリー性を重視、３）Share（シェア）：熊本県、企業、県民やファンが“三方よし”の関係を築き、継続性を重視する。の「３つのS」を軸に100年後も愛されるキャラクターを目指します。

基調講演

よか笑顔のために

報告者／座長：大川　洋二（全国病児保育協議会 副会長）
講師：藤本　保（大分こども病院 院長）

今大会の基調報告は大分こども病院院長の藤本保先生が行った。平成24年8月に子ども・子育て関連３法が成立し、幼児教育・保育・地域の子ども・子育て支援を総合的に行うようになったが、この新制度は本年４月から本格施行されている。従来の病児・病後児保育は病児保育事業とかわり、消費税他の財源から確保された約１兆円より予算化されている。その目的は今研究大会のテーマ子と同じ子どもの笑顔あふれる社会づくり、「よか笑顔のために」です。病児保育は「地域の実情に応じた子育て支援」に含まれ、多様な保育ニーズに応じる事業のひとつです。病児保育事業としてまとめられたものは病児病後児保育、体調不良児対応型、非施設型（訪問型）の３種類となります。

病児保育は究極の子育て支援であり、子どもの健康回復と生活の質を高めると共に、家庭の看護力を育成し、親の子育ての精神的支えとなり、親子の愛着や絆

を形成することを手助けします。その為には保育看護の確立が必要です。「育つを支え」、「育てるを助ける」には保育と看護の融合、保育看護を充実させることが大切です。しかし看護師、保育士の定員は削減され安心と安全が担保される病児保育を行う制度が後退してきています。全国病児保育協議会は保育看護スタッフの増員を図るよう活動することが必要です。

また訪問型病児保育の在り方も検討する必要があります。訪問型の利点を維持し、病児保育の質を担保するためには専門の資格を持つ保育士、看護師が従事し、さらに保育看護の腕を磨く制度が必須です。スタッフ一人での派遣事業では、緊急時の対応が出来ず事故を防ぐことができません。

昨年から病児保育専門士が誕生し、高い専門性が評価されることになりました。この高い専門性を維持するために専門士になった後の研修の取り組み、さらに後輩を育てる業務に邁進しなければなりません。専門士になられた皆様に期待するところです。

教育講演 1

人に自分の気持ちを伝える具体的な方法
～病児保育室と保護者のコミュニケーション～

報告者／座長：松倉　誠（崇城大学薬学部 教授）
演者：矢野　美枝（e.a.o.チャイルズ コミュニケーション スクール）

まず、講演は具体的で理解しやすい状況設定でのお話でした。保護者との関係性をどのようにもって行くかを、相手と自分という２つの要因から分析して行くことをお話になりました。これはどの立場であろうと、どの職業であろうと普遍的な考え方であると思いながら、お話を聞いておりました。

子どもと関わるということは、実は親と関わるということが大半のことであるのは皆実感していますが、では「自分の気持ち」を相手に伝えるための工夫は、どれだけしていますでしょうか。誰にでも通用する方法ではなく、相手に合わせて、自分に合わせた「言葉」を工夫することを重要視すべきだとの講演であったと思います。相手に合わせるのはよく聞きますが、自分に合わせるというのは滅多に聞きません。

分析というのは客観視しなければ出来ないことです。仲間と分析をするのは議論、討論と言いますが、日常的状況では特別な時間でなければ出来ません。自分の中で議論する、客観視する習慣がつけば、何時でも何処でも工夫ができますし、「失敗は成功の母」となり経験を早目に積み上げていけるのではないでしょうか。矢野さんの話しを聞きながら想像は膨らみ、聴衆の学会参加者も自分の中で工夫して実践に役立つのではと感じました。私も外来でもう一度視点を変えてコミュニケーションを見つめ直して行きたいと考えました。

教育講演 2

障がい児のデイケアと病児保育

報告者／座長：水元　裕二（みずもとこどもクリニック みるく病児保育室）
講師：緒方　健一（熊本小児在宅ケア・人工呼吸療法研究会会長 おがた小児科内科 院長）

緒方先生は、熊本県における（というよりも日本における）「小児在宅医療のパイオニア」です。今回の教育講演では、先生が開業以来取り組んでこられた障がい児の在宅訪問診療、訪問呼吸リハビリ、昨年３月から自院に併殺された特定短期入所施設「かぼちゃんクラブ」の紹介を通して、我々小児医療に携わる者や病児保育施設が、今後新たに担うべき役割や方向性を示されました。

まず、戦後の出生数の推移を提示され、わが国が直面している少子超高齢化社会においては、女性（母親）の労働力確保が必須であり、働く母親の育児支援や負担軽減のために病児・病後児保育施設の果たす役割は益々大きくなると述べられました。一方、障がい児を授かった場合の社会的インフラは小児在宅医療であるという考えから、自ら主催されている熊本小児在宅ケア・人工呼吸療法研究会の活動を報告され、今後は社会的ニーズに対応できる小児科診療所が必要であると説かれました。

障がい児を授かった親は、児の介護者として日夜拘束され自身の休息もままならない状況にある場合がほとんどであり、睡眠時間すらまともに取れない親の支援として、緒方先生は、新たに人工呼吸管理を必要とする児を対象とした日帰りの預かり施設まで設立されました。資金もほとんどが自らの持ち出しで、行政からの支援は後からついてくるというような状況の中、やりがいを持ったスタッフの献身的な協力により「明るく、楽しく」対応されている姿が印象的でした。医療機関併設型病児保育室の特定短期入所施設への展開の可能性についても触れられました。

最後に、麻酔科出身の先生らしくお得意の呼吸器リハの説明をされ、胸郭形成の改善が見られること、IPVやCoughマシーンによる排痰促進、喉頭ファイバーを用いた誤嚥寸前の興味深い映像などを見せくださいました。

おだやかで、朴訥とした口調の中にも、患者や家族への優しい思いやりあふれる先生の講演に聴衆はみな感動を覚えました。

PS：緒方先生は日本医師会の「赤ひげのいるまち」（15/4/3,4/11）に出演されています。日本医師会のHPを是非ご覧下さい。

教育講演３

子どもの素顔、泣き顔、笑顔、気になる顔

報告者／座長：江上　公康（えがみ小児科 病児保育エミー）
講師：武谷　　茂（久留米市 総合小児科医）

「子どもの素顔、泣き顔、笑顔、気になる顔」というテーマで久留米市の総合小児科医の武谷茂先生に御講演頂きました。

御講演は、先生が救急病院で仕事をされてきたなかで経験された様々な症例を「紙芝居」のように楽しい解説付きで次から次に解説されていかれました。

病児保育に携わる保育士はさまざまな場面で子どもと顔を合わせ、子どもの健康状態に対応しなければなりません。その中で保育士にも看護学を学んでもらい、その存在が現場でのチームに欠かせない存在になっていく様子を、先生がご経験された症例を通して数多くご提示していたたきました。

途中、ユーモアを交えたお話もあり、会場では笑いが絶えませんでした。

本教育講演を聞いた皆様が、病児保育を担う一員としてこれからも子どもたちにより一層向き合って頂けたらと願っております。

基礎研修

報告者／座長：帆足　暁子（世田谷子どもクリニック）

基礎研修は、大会１日目の午後、第２会場において病（後）児保育の「保育」「看護」「保育看護」について講義が行われました。

基礎研修は、協議会の研修委員会が担当し、講師も務めさせて頂いています。新しく病児・病後児保育室のスタッフとなられた方を対象にしていますが、昨年までの参加者のアンケート結果から、数年を経たスタッフの参加も多くみられ、基礎を振り返りたい方をも対象にと考えています。内容は、保育士のための基礎看護と看護師のための基礎保育、そして基礎的な保育看護という３つの講座で構成されています。

「保育」は、キッズタウンむかいはら保育園病後児保

育室「すみれ」（東京）の室長（兼園長）の稲葉穂さんが初めて担当されました。保育所の役割や課題、0歳児から5歳児までの年齢別保育内容についてわかりやすくお話頂き、保育所での子どもとの信頼関係の育成に必要な、年齢別保育における「ゆるやかな担当制」にも触れて頂きました。アレルギーのお子さんの除去食の変遷等、現場でも共感できる事例を紹介されました。残念ながら、用意されたスライドが半分しか映らないハプニングがあり、映像と合わせてお話を伺えませんでしたが、保育の基礎はしっかりお話頂けたと思います。

「看護」は、ひよこ保育園病後児保育室ひよこのいえ（宮崎）の看護師の原文子さんが担当されました。3年目ということもあり、小児看護の基礎として「毎朝の体調チェック」や「フイジカルアセスメント」について具体的にお話し頂き、現場での場面と合わせてイメージでき、改めて看護面としての整理が出来たのではないかと思います。また、小児看護学会（2012）における「小児看護の日常的な臨床場面での倫理的課題に関する指針」から看護実践にとって重要な「倫理原則」として「自律」「善行」「無害」「正義」「誠実」「忠誠」について説明して頂けたことは、これからの病（後）児保育のあり方に一つの指針となるように思います。

「保育看護」はナオミ保育園病後児保育室バンビ（東京）の室長（兼園長）の藤巻元美さんが担当されました。これまでは「保育」のお話を担当されていましたが、今年は「保育看護」として、保育看護の意義や特徴、子どもの心理、保育についてもお話下さいました。何より、日本で最も早く病気明け保育室を始められた当時から病後児保育に携わっておられ、バンビが誕生した当時の保護者の方々の悩み等お話し頂けたことは、改めて病（後）児保育室の意義を深く考えさせられる契機となったと思います。特に、保護者支援は、直接的な子ども支援であるという実感をこれまでの経験からお話し頂き、協議会が訴えている「病児保育は究極の子育て支援」の意義がより明確になったことと思います。

基礎研修の時間は、特別講演や教育講演、一般演題、ワークショップ等と重なっていましたので、参加者はかなり少なくなることを予想していましたが、多くの参加者を得ることができました。研修委員会として、改めて基礎に対するニーズを受け止め、充実した研修にしていきたいと考えています。

なお、基礎研修は、全国大会に参加できない方々のご要望にも応えるべく、出張講座を行っています。交通費は、研修委員会予算から支出されますのでブロック研修会や県単位の研修会等、是非、研修委員会にご依頼下さい。申請書はホームページ上からダウンロードできます。ご依頼をお待ちしています。

ステップアップ研修

病気の子どもと家族へのサポート

～病棟保育がひきだす子どもと家族の笑顔～

報告者／座長：佐藤　里美（さとう小児科医院 病児保育室バンビーノ）
講師：鳥巣麻衣子（福岡大学病院 病棟保育士）

今年のステップアップ研修は、福岡大学病院小児科で病棟保育士としてご活躍され、医療保育士第1期生として資格を取得されている鳥巣麻衣子先生にご講演をお願いいたしました。病棟保育、病児保育ともに、病気の子どもに寄り添うこと、病気をもつ子どもの保護者を支援することなど、目指すところや願いなど共通するところはたくさんあります。鳥巣先生のお話しの中からも病棟保育士として入院中の子どもたちや保護者の一番近くで、子どもたちの幸せのために日々ご活躍されている姿が手に取るように伝わってきました。当日は実際の保育の様子や遊びがわかるスライドをたくさんご用意していただきました。病児保育室でも私たち保育者は毎日いろいろな遊びを考え、子どもたちの笑顔を楽しみにしています。似たような遊びでも違った角度から見ると新たな遊びのヒントを思いつくこともあり、講演を聞いた保育士・看護師が参考にさせていただける遊びの内容が盛り込まれていました。また福岡大学病院では異職種間の連携が素晴らしく、保育士の存在、活動にとても理解のある職場であると感じました。何故その保育をしたのかを明確にし、その結果を評価すること、カンファレンスにも必ず参加し医療者側からのフィードバックをもらうことなど、努力を惜しまない結果であると感じました。病院という閉ざされた空間、慣れない場所・人の中で、情緒の安定

を図り、子どもらしい生活ができるように支援していく保育の精神には大変共感するところがありました。子どもの仕事は遊びであり、遊びを通して辛いことも頑張れる力を発揮します。私は病気であるという理由で遊びや生活を制限するだけでなく、個々の病状に即した遊びを提案しストレスを発散できる保育が病児保育でも大切であると思っております。今回のお話しを伺い、その必要性を再確認いたしました。

なお今年度よりステップアップ研修参加により、病児保育専門士資格更新の業績ポイント10単位が認められております。

一般演題Ａ

報告者／座長：池澤　誠（池沢小児科医院 みるく病児保育室）

今回の一般演題Aのセッションは大会第１日目第３会場にて、ランチョンセミナー後に行われ、感染症をテーマとした４題が発表されました。

■演題Ａ-１「病児保育室における感染症の対応
～インフルエンザを中心とした検討～」
発表者　中川　和美
（横井小児科内科医院病児保育室「こりすの里」）

インフルエンザの感染性の強さは周知のとおりです。病児保育室の中での感染という大変悩ましい問題に対して正面から取り上げていただきました。興味を引く演題であったためか質問が相次ぎ、さまざまなディスカッションが行われました。

■演題Ａ-２「病児保育施設への診療情報提供書からみた抗菌薬使用状況」
発表者　飯島　建志
（練馬区医師会病児保育センターぱるむ光が丘）

抗菌薬の適正使用が叫ばれて久しい状況の中、病児保育室という小児の外来治療に限られた、しかも多数の施設からの抗菌薬使用状況をまとめた非常に貴重なデータを、しかも経年的に報告していただきました。

■演題Ａ-４「RSウィルス感染症の室内感染に関する検討」
発表者　吉田　恵理
（OCFC 病児保育室うさぎのママ）

演題Ａ－３と演題Ａ－４は順番をかえて、演題Ａ－３を先に発表されました。演題Ａ－１と同様、院内感染について取り上げていただきました。RS感染症の室内感染という難しい問題に対して詳細な検討を含めて報告されました。

■演題Ａ-３「RSウィルス迅速検査は必要か
～ RSウィルス感染を防ぐ試み～」
発表者　松木　愛
（OCFC病児保育室うさぎのママ）

RSウィルス感染に対する迅速検査が臨床応用されていますが、これをスクリーニング検査として使用するという画期的な試みを報告していただきました。

いずれの演題も大変興味深いもので、会場には大勢の人が集まっていただきました。

ディスカッションも盛り上がりましたが、ほぼ時間通りの進行となりました。演者の皆様をはじめ関係者各位のご協力のおかげと思います。感謝申し上げます。

一般演題Ｂ

報告者／座長：増田　隆二（増田クリニック小児科 病児保育室あひるハウス）

Ｂ－１「看護職による訪問型病児・病後児保育事業」利用登録者のニーズ調査～雲仙市での取り組みから～は、新しい試みの事業で開始より１年半での報告であり、今後のさらなる利用増とその経過報告を期待します。

Ｂ－２病児と保護者の朝の生活実態調査～第２報健康児の朝食摂取状況について～は、前回病児での報告と合わせて指標として有用でした。

Ｂ－３町田市病児病後児保育事業連絡会の取り組み～病児病後児保育室の連携と町田市子ども生活部との連携～は、先進的な取り組みで他地域でも参考にしていきたい連携内容でした。

Ｂ－４実績調査から考察される適正な補助金給付について－平成25年度実績アンケート調査のまとめと提言－とＢ－５病児保育施設向けインシデント管理システム（mims）の有用性と課題は、２題とも全国病児保育協議会調査研究・インシデント管理委員会からの報告で全ての協議会会員が共有すべき内容で会誌に掲載していただきたい内容でした。

Ｂ－６病児保育室における一人親家庭の利用状況と子育てに関する意識調査は、よく丁寧に調査報告されていました。

Ｂ－７電子メールを用いた予約管理システムの概要と運用効果は、明日からでも参考にして取り入れたいシステムの報告で「予約取り消しメール」と「予約確定メール」の保護者からの送信は応用範囲の広い内容でした。

Ｂ－８横浜市病後児保育室の15年のあゆみと現況は、横浜市内の病児保育室18施設に対して保育園型病後児保育施設４園のあゆみと現況の報告で参考となりました。

一般演題Ｃ

報告者／座長：水元　裕二（みずもとこどもクリニック みるく病児保育室）

このセッションの座長を担当して、病児保育には保育士、看護師、医師だけでなく、薬剤師、栄養士など多くの職種が関与する時代になっており、多職種間の情報共有、協働によって施設運営がなされていることを改めて認識しました。

また、それぞれの施設で地域の実情にあった病児保育が行われており、持てる戦力を最大限に生かす様々な工夫を凝らされていることが、発表を通じてよく理解できました。

病院併設型の施設では、（管理）栄養士によって、食事にまつわるリスク管理（アレルギー、誤嚥）や、季節の食材を使った豊富なメニュー、手作りおやつなど給食の改善が見られるという報告がありました。

薬剤管理表やSOAP形式の保育看護計画を作成し、問題点の整理に役立てているという報告や、職員間の情報共有のため、情報の「見える化」をはかることにより与薬間違いや誤食を防止しているという報告もあり、インシデント・アクシデントの防止のための対処法として参考になりました。

病児保育室でタクティール（タッチ）ケアを行い、スキンシップによる精神的な安定、良眠だけでなく、呼吸状態の安定、子どもの心を受け止める非言語的コミュニケーションとしても有用という報告は、明日からでも取り入れうる手法であり、今後の展開に期待が持てます。

心理的社会的な問題を抱えた児への関わりの報告は、病児保育室が治療に役立つ環境であることを示し、こころの疲れを持った子のオアシスになりうる可能性が示されました。

乳幼児突然死症候群を防止するため、睡眠時に5分毎、あるいは10分毎に呼吸状態をチェックするという報告では、家庭でも親が注意するようになるという波及効果ももたらしているようです。

開業後すぐに病児保育施設を併設し、お断りゼロを目指しているという報告は、民間医療機関併設型だからこそのフレキシブルな運営により成立しているようです。

「みんなちがってみんないい。」それぞれに得るものが多い有意義な講演でした。

一般演題Ｄ

報告者／座長：北野　昭人（北野小児科医院 みるく病児保育室）

一般演題Dでは九つの発表がありました。そのうちの４演題（Ｄ１，Ｄ４，Ｄ６，Ｄ７）は病児保育の運営に関するものでした。

Ｄ１では運営自治体以外の地域からも利用者を取り込むことによって運営の安定化を目指しているとの報告でした。

Ｄ４では病児保育における延長保育事業についての問題点が報告されました。延長保育が児にとって本当に必要であるかを考えさせられる発表でした。

Ｄ６では自治体が利用料を全額負担したことにより、病児保育利用者数が大きく増加した例が報告されました。利用者の間で負担に差がある場合の問題について意見交換がなされました。

Ｄ７では訪問型病児保育モデル事業の経過報告がなされました。今後、訪問型病児保育の安全性をどう担保していくかが問題で、更なる事業の展開を見守りたいと思います。

その他Ｄ２では保育園との連携を模索する試みが報告されました。将来病児保育と保育園は密接な連携が必要となります。今後の運動の広がりを期待したいと

思います。

Ｄ３では複数の事業所が協力して作成された保育看護計画書について発表がありました。今後作成された計画書についての評価もご発表いただければと思います。

Ｄ５では大学病院における病児保育、病棟保育のローテーションモデルについて報告がありました。大学病院という恵まれた環境で保育士のスキルアップが期待されます。

Ｄ８では保護者へのアンケートを踏まえて、感染予防リーフレットを作成したことが報告されました。今後リーフレット作成後の保護者の反応についてもご報告いただければと思います。

Ｄ９は新施設に移転後のインシデントの分析とその予防策の発表でした。今後予防策の効果についてもぜひご発表いただければと思います。

第５回感染症セミナー

報告者／座長：大川　洋二（感染症対策委員会委員長 OCFC病児保育室 うさぎのママ）

感染症セミナーはプラザホールにて250人の皆様にご参加いただきました。佐藤勇委員からは予防接種の考え方を団扇で答える出席者参加型の質問形式にて、わかり易く、またピットホールへの注意を含めて講演頂きました。個人免疫と集団免疫、副反応と有害事象、同時接種、キャッチアップスケジュール等についてお話しされ、保育士さんにもよく理解できたことと思います。

宮崎大学小児科教授布井先生からは発熱のメカニズム、発熱性疾患のサイトカインプロフィール、発熱の感染への影響と解熱剤の使い方などに関して講演されました。医師にとってもハイレベルな話もありましたが、保育士なりに最先端の取り組み方に触れることができて、刺激的な講演であったようです。自分たちの仕事がこういった世界的業績の上に成り立っていることを知ることはとても重要です。

京都府立大学小児科講師三沢あき子先生からは班長として統括した厚生労働省研究班作成の病児・病後児保育における保育士・看護師等のためのハンドブックから感染症対策について解説講演を頂いた。協議会のガイドラインと比べ内容的には大きな齟齬はなく、協議会ガイドラインが主に病児保育に携わる保育士、看護師を対象としているのに比べ、ハンドブックは病児保育を知らない一般的な保育士もその対象にした入門書的役割を担っているようです。講演終了後フロアーとの議論で、スタッフのマスク着用、飛沫感染を防ぐための2m間隔の維持について等が話題として挙がりました。

委員会アンケート調査報告は大川洋二委員長から行われました。今年のアンケートは208施設から頂いております。わかり易く、役立ったとの回答を頂きました。特にインフルエンザ、感染性胃腸炎での評価が高かったようです。室内感染例では今年度も水痘、感染性胃腸炎の報告がありました。感染性胃腸炎では入室時嘔気がみられなくとも疾病の性格上、嘔吐を意識した対応が必要であることがわかりました。また今回RSウイルス感染症の報告も見られました。

165分間のセミナーが一瞬のうちに過ぎ去り、参加者に強いインパクトを与えたようです。

第26回 全国病児保育研究大会 in にいがた
平成28年７月17日（日）・18日（月・祝）開催予定

保育園型ＰＴ

実践から学ぶ

報告者／座長：髙橋　広美（砂原保育園 病後児保育室とまと）

今回は開設から17年目を迎えた「西の台デイケアルーム」と11年目の「唐津情報センターしろくまくん」の実践報告から学びました。

病児・病後児施設と利用者との関係作りは、働きを伝え、興味を持ってもらうことから始まります。「地域を知る事」はとても重要で、必要とされている事に気づき、課題にも取り組むことが出来ます。

就労支援になりがちな「子育て支援」から、当協議会が最初から謳っているように子どもの育ちの支援、すなわち「子育ち支援」としての病児・病後児保育はどうあるべきかを考えました。

第２部のグループセッションでは、40名の参加者が６グループに分かれて、各々の置かれている状況の中での取り組みや、課題、強みや弱み等を出し合いました。園長、看護師、保育士と職種はさまざまでしたが、より良い病児病後児保育の実践のための意見交換は、一時も鎮まることなく活発な意見が続きました。

保育園併設は、孤立しがちな病後児保育室担当者が生き生きと業務に励み、保育園の一員として積極的に保育に関わっていけるにはどうしたらよいか、が課題にあがります。これは、病後児保育に対する熱意だけでは改善されず、具体的な取り組みや工夫が必要です。また、行政の仕組みを知ることが出されました。これは、施設長の力が必要になってきます。

子どもや働く親の為に安心できる環境の中で保育がなされ、お迎えに来た保護者にはほっとできるような空間でありたい。それが保護者との関わりを深め、更に病児病後児保育の理解に繋がるという事。また色々な困難はあるけれど、あきらめずくじけずにチャレンジしていく先に、仕事の励みややりがいが用意されている事などが、確認されました。

保育園併設の病後児保育は稼働率の低さが指摘されます。このような状況を改善するにも志を同じにする仲間がいる事が一番の力だと感じました。

調査研究委員会 インシデント管理委員会

調査研究・インシデント管理委員会講習会報告

報告者・司会／座長：羽根　靖之（三重県 よいこ病児保育室）

調査研究・インシデント管理委員会では、『病児保育室における事故予防』というタイトルで講習会を企画し、４つの講演によって会員の皆様に事故予防に関する再認識と事故防止システムの構築に関する啓発を行いました。

特別講演は全国保育園保健協議会・安全対策委員会総括リスクマネージャーで社会福祉法人八越会ちどり保育園副園長の吉岡敦志先生にお願いしました。先生には全国保育園保健協議会での取り組みの他、自園で独自に取り組まれている園庭ハザードマップなど実例やデータをもとに興味深いお話を聴かせて頂くことができました。

その後、私共の調査研究・インシデント管理委員会より、佐藤勇武委員が『病（後）児保育室のインシデント・アクシデントレポート』と題してチェックリストを中心にレポート作成方法について、向田隆通委員が『mimsの現状と課題』と題して、mimsの今後の普及拡大や見直し等について、荒井宏治委員長が『預かり児の事故を防ぐために、危険予知トレーニングをし

てみませんか』と題してイラストを使っての事故シミュレーションなど事故予防の一般的な啓発についてレクチュアー致しました。

参加者は40余名で、フロアからの質問や意見交換も活発にでき、今後の当協議会におけるリスクマネージメントに関する取り組みの重要性の再認識とmimsのバージョンアップといった見直しなども含めて、今後の委員会活動への示唆に富んだ内容の講習会となったものと考えます。

ワークショップ１

病児保育室でできる「服薬支援」

報告者／ワークショップリーダー：木下　博子（大分こども病院）
三村　美香（早川小児科クリニック）

病児保育室に入室してくるこどもの中には、「服薬」に拒否反応を示す子も少なくなく、「いかにして服薬させるか」は、病児保育室のスタッフにとって課題の一つとなっている。薬のことを知り、病児保育室での服薬支援に生かしていこうとWSを企画した。その報告をする。

１）服薬に関する疑問：事前アンケートで質問が多かった内服薬の服用時間、保管方法、ダイアップ坐剤の使い方、外用薬の保管方法、ジェネリック医薬品について薬剤師が説明した。

２）薬の味を知ろう！飲みにくい薬の飲ませ方の工夫を皆で考えよう！：事前アンケートの「服薬させるのに苦労した薬」「味見をしたい薬」の回答をもとに９つの薬の味見を行い、続いてグループで飲ませ方の工夫を検討した。薬の味見は初めてという方も多く、１つ１つの薬の味を自分の舌で確かめながら、「この薬は飲める」「あっ、口の中に入れておくと次第に苦みが出てくる」「こんなに苦い薬だったんだ」等の声が聞かれた。飲みにくかった薬については食品や服薬補助食品を用いて試したが、混ぜてもざらつきが気になるものや薬の苦みをマスクできないものなど新発見が多くあった。また、お薬用のスプーンや100円ショップの乳児用の柔らかいスプーンが飲ませやすい、錠剤はゼリーに包んで飲ませる、漢方薬はチョコレート等の味が濃い物を口直しに食べさせると飲める　など各施設で行っている工夫も紹介された。

３）服薬意欲を高める取り組みを考えよう！：薬が飲めたら十分に褒める、他児が飲んでいるところを見せ、自分もできると思わせる、プレパレーションを行う、お迎えの際、保護者、子、スタッフが揃っている所で上手に飲めたことを報告し、「飲めた方法」を保護者に伝え、保護者にも薬が飲めるという気持ちになってもらう　等の意見が出た。

薬の味を知り、多くの工夫を知り得たので、それらを病児保育室での服薬支援に生かしていくことを意思統一した。

ワークショップ２

看護師と保育士の理想のCooperation（協働）
－医療と保育の接点に位置して－

報告者／ワークショップサブリーダー：江頭　則子（練馬区医師会病児保育センターぱるむ光が丘）

病児保育に携わる看護師は、クリニック業務との兼任や、保育園型、単独型での一人職種など、立場や関わりは様々です。ワークショップ２ではそのような様々な立場の看護師さん42名にお集まり頂き、日々の保育看護を振り返って頂きました。テーマは、「保育看護の理想的な協働について」ですが、同時に「より良いコミュニケーションとは？」というテーマについても考えながら、症例を用いてグループ討議を進めていきました。

まずは、二人一組で行う自己紹介。一人目は、聴き手がスマートフォンを片手に相手の顔を見ず話を聞き、もう一人の自己紹介では、相手と向き合い相づちを打ちながらしっかり話を聞くという方法で行いました。コミュニケーションにおける「傾聴」について考える機会となりました。

グループ討議は、６～７名ずつのグループに分かれ、保育看護の症例について、「問題点とそのアセスメント」「保育看護目標に向けた保育看護計画」について話し合い、その後、「保育士との協働による具体策への展開」という視点で討議を進めていきました。グル―プ発表では、各グループの活発な意見交換をまとめて頂き、その後、リーダー側から各症例でおさえておきたい「保育看護のポイント」をお伝えしました。

このワークショップは、グループ討議がメインですが、進行の随所に、症例に関連するような「看護師国家試験問題」を散りばめて提示しました。かつて学んだ基礎知識は、保育看護の根拠となるもので、その大切さを各自再確認しました。病児保育に携わる看護師として、医学的な根拠を保護者や保育士にもわかり易く伝えていくことは、重要な役割の一つです。加えて「傾聴の大切さ」を含め考えてみると、理想的な協働とは、医学的な根拠や看護を一方的に伝えるのではなく、子どもの代弁者になり得る保育士の言葉に耳を傾け、根拠に基づいた保育看護を共に展開していく事ではないかと思います。ワークショップを終えた今、改めてこの有意義な時間に感謝いたします。

ワークショップ３

やさしい看護　ゆたかな保育

家族の中の子どもたち　私たちにできる「支える」ということ

報告者／ワークショップリーダー：岸本　範子（医療法人 あおぞら会ふじもとクリニック 病児保育室こひつじ）

やさしいしい看護ゆたかな保育チームによる２回目のワークショップ。保育室からのお便りが、病気の子ども預けて働くお母さんを支えることができると知り、二つの事例「除去食が多いアレルギー児の初利用」「症状の経過が長引いている０歳児の利用」について、病児保育マニュアルvol. ２第九章 保護者対応を参考にしながら参加者で討論しました。

お母さんに子どもの一日の様子を伝えるとき、“大切にしたいこと”を導き出すための方法として、事例のお母さんの言動からまずは現状を知り、家族に何が起こっているかを見つけていきました。

次に、何がそうさせているのかを探り、私たちが家族にどうあってほしいか、どうなることが理想的であるかにたどり着きました。私たちの思いが、どのように家族を、お母さんを支えていけるのか。そのために各チームが大切にしたいと思ったことは「お母さんへの労いと共感」「お母さんの気持ちに共感して励ます　症状を適切に伝える」「一日の様子をしっかりと伝える　お母さんに寄り添った言葉かけと家庭看護へのアドバイス」「お母さんへの労いと励まし　相談窓口となって家庭看護へのアドバイス」「具体的なアドバイスとお母さんの気持ちをくみ取る　子どもが安心して病児保育室で過ごしていることを伝える」「お母さんの大変さに共感しながら一日の様子を伝える」「回復の程度をきちんと知らせ保育園を休む必要があるときはそう伝える」でした。討論チームは病児保育1、2年生とベテラン職員とで編成しました。

後日いただいたアンケートの回答で、先輩の意見が参考になったこと、一つの事例について他施設と討論できたことがよい経験になったなどの感想をいただきました。

今回の大会テーマ「子どもも親もよか笑顔」を今後の目標にできる討論内容になったと思います。「思って、語って、カタチ（言葉）にする」方法として、各施設で参考にしていただければ幸いです。

ワークショップ4

「保護者理解」
～親も人間です～のリーダーを終えて

報告者／ワークショップリーダー：柴田　恒美（NPO法人 子育て談話室 理事長）

まず最初に今回、こんな機会を与えて頂いた事に深く感謝致します。

さて、私がリーダーを務めたワークショップ4は全国各地から36名の病児保育に関わる皆さんが集まっているグループでした。こんな会に関わる緊張もありましたが、以下のようなグループワークを進めていきました。

まず、グループ内で自己紹介です。氏名、住んでいる地域、職種、経験年数など　紹介してもらい、皆さんの緊張がほぐれたところで次に進んでいきました。

次に、他の人に聞いてみたい事紹介をやり、悩んでいるのは自分だけではないんだという気付きを得られた方が多かったようです。

さらに、「こんな親、理解できない！」というタイトルで、今の保護者の現実を皆さんに出し合ってもらいました。各自3項目、付箋紙に書いて出してもらい、それを説明しながら順次模造紙に貼っていく形をとり、グループの中で共有しました。

この中には現代社会や子育て家庭が抱える課題などが垣間見えました。

そこで次は、「『なぜ、そうする』と思う？」というタイトルで親の現実に心を寄せる支援者の気持ちを考えてもらいました。

ここでも各自、付箋紙に書いて出してもらい、模造紙に貼ってグループで共有という形をとりました。この活動は、これまでのひとり一人の参加者の体験を基に、一歩深いところでの保護者理解に繋がったようです。

そして、それぞれのグループで出た内容を参加者全体で共有するため、グループ発表や他のグループを見て、質問してまわる時間を作りました。

最後はグループ内でのふり返りとリーダーの一言で終了しました。

参加された皆さんがそれぞれの地域へ、ここでの活動の気付きを持ち帰って頂き、～子どもも親もよか笑顔～になる事を願っております。

ワークショップ5

遊び方は無限大！新聞紙あそび

報告者／ワークショップリーダー：小柳　亜季（えがみ小児科 病児保育エミー）

ワークショップ５では、手軽に気軽にどこででも遊べるあそびのひとつとして、新聞紙あそびを取り上げ、室内安静～室内保育の活動範囲内(幼児～小学校低学年対象)で楽しめる新聞紙あそびの紹介・実演・実践を行いました。

新聞紙を折ったり破ったりしながら話を進めていく「新聞紙シアター」では、新聞紙が「ぼうし→ハンカチ→おにぎり→ふね→シャツ」に形を変え、最後に半袖シャツから長袖シャツに変化した時には「おぉ～！」と、驚きの声も聞かれました。その後は２人組になって実際に演じ合ってもらいましたが、イメージを共有し、無事に長袖シャツになると「できたー！！」「これはおもしろい！」と声をあげ、お互いに喜んでいる姿も見られました。

他には、傘を使った「玉入れ＆新聞紙シャワー」、「三角バケツであそぼう」「新聞紙長さ競争」「ステッキキャッチ」「てるてるぼうずであそぼう」「ひっぱり相撲」「流れ星であそぼう」「新聞紙じゃんけん」「新聞紙グローブ」など、約１５種類の遊びの紹介と実践を、エピソードを交えながら行いました。初対面の方同士が多かったようですが、同じ遊びを楽しむうちにすぐに笑顔がこぼれ、和気あいあいとした雰囲気の中、時間が過ぎて行きました。

今回取り上げた新聞紙遊びは、１人で遊ぶものは少な

く、ほとんどが2人・3人、またはそれ以上で遊ぶものでした。保育者や、同室の他児ともコミュニケーションがとれ、創意工夫することによって、本当に、遊び方は無限大に広がっていきます。今回は、新聞紙･ペン･テープという最小限の材料でしましたので、それぞれの保育室でどんどんアレンジして子ども達と楽しんでもらえたらと思います。ご参加いただいた皆様、たくさんのご協力をいただき、ありがとうございました。

ワークショップ6

手作り人形を作って遊ぼう

報告者／ワークショップリーダー：内田　美恵（熊本藤富保育園 病児保育室ほほえみ）
民谷　邦子（熊本藤富保育園 病児保育室ほほえみ）

この度､全国病児保育大会のワークショップでは「手袋人形を作って遊ぼう」をテーマに保育実技をしました。手袋人形は、様々な年齢の子ども達に合わせて、バリエーションも豊かに遊べる物で、また、素材もフェルトを使っているので、子ども達にも安心して触らせることが出来るという“ねらい”の元、遊び方の実演をしました。

遊び方は、基本的な物から、アレンジした物、また、今回作る人形以外の手袋人形の紹介もしていきました。実際作っていく過程で、耳や鼻の付ける位置に迷われる方もいましたが、完成品の見本を自由に見れるようにしておいたことで、付け方を各自確認されながら作られていました。なかには、耳や鼻などの付ける位置をアレンジされる方もおられ、同じ材料でも、違う表情の人形が作れる面白さをグループ内でも感じられ、これらをきっかけに場の雰囲気も和やかになっていました。

作成中は静かな曲を流したり、私たちも各テーブルを回り、作り方のアドバイスをしたり、参加されている方の園や病院での病児保育について話して頂いたりして、情報交換の場となるようにしました。作成にあたり、進み具合には個人差があることも想定し、ぶたさんの手袋人形の他に小鳥の指人形の材料も用意して、はやく作り終わった方への対応できるようにしておきました。

時間内に完成させることができない方もいらっしゃいましたが､皆さん､興味深く私たちの実演を見て頂き、私たちにとっても、とても良い経験になりました。

ワークショップ7

作図を使った、かわいいおたより、つくってみませんか？

報告者／担当講師：福田　洋介（ネバーネバーランド）
補助講師：福田　美香（ネバーネバーランド）

私たちのＷＳは、パソコン初心者でもできる「かわいいおたより作り」を予定していました。

反省点１。このＷＳは参加者に、使い慣れたパソコンをご持参いただく、という条件を設けていました。この条件が参加の敷居を高くしてしまったのだと思います。参加者数は定員25名のところ12名と少数精鋭でした。

反省点２。講習内容を盛り込みすぎました。遠路はるばるお越しいただくみなさんに「私たちの知るできるかぎりのノウハウを提供したい」という思いでしたが、限られた時間の中でこなしていただくのは、かなりハードでした。

反省点以上に、開催できてよかった点、参加していただいて良かった点。事前アンケートをとらせていただきました。お忙しい中、多くの施設の方にご協力いただけましたこと感謝いたします。アンケートの目的は参加者の技術レベルの把握、このＷＳにどんなことを期待されているのか知っておきたい、という気持ち。

嬉しいことにアンケートにお答えいただくだけでなく、大変熱いご要望が次々と書き込まれたファックスが返信されびっくり。と、同時に「これは大変、初心者向けの優しい講義だけではとても満足していただけそうにない」と資料をイチから練り直し。

ＷＳの内容は、Wordで「うまくいかない」けれど「どうしたらいいか分からない」という状況を想定し、普段なら諦めているかもしれないレイアウトのトラブルへの対処法を実際にWordを操作しながら体験していただきました。

美しい文書とはなんなのか、何に気をつければ今までと同じ文書を作っても美しいと見てもらえるのか。どんなときにどんな書体を使えば見てもらえるのか、読んでもらえるのか。初心に戻って、行間はどのくらいが適切かなど、編集者の立場からのお話しもさせていただきました。

受講されたみなさんが、今まで悩んでいたところを一つでも二つでも、悩まず操作できるようになっていただけていたらいいな、と今思っています。

ワークショップ8

発達障害を持つ子どもたちとの関り パートII

報告者／ワークショップリーダー：大神以都子（しんどう小児科 病児保育室いないいないばあ）

このワークショップでは、日々保育をしている中で、コミュニケーションがとりづらかったり、落ち着きがなく対応に困ってしまった時など、子どもとどう関わったら良いかをテーマに35の施設の参加者と共に議論していきました。

事前に実際にあった事例、臨床心理士の先生に聞いてみたい事などアンケートをとりました。

ワークショップ当日、前半は事例を２施設に発表して頂き、グループに分かれて「良かったと思う点」「工夫すべき点」を中心に討議してもらいました。後半は講師のしんどう小児科臨床心理士の木村先生に、事前アンケートに目を通してもらい、それを含めての講義をして頂きました。

発達障がいを持つ子どもの特徴を早い段階で見極め、短時間の利用でも充実した時間が送れるようにするにはどうしたら良いか、入室前に保護者から情報を出来るだけ多く得るにはどのような聞き方をしたら良いか、過ごしやすい保育室の環境作り等すぐに実践できる実りある話を聞く事が出来ました。参加者からは、知りたかった内容をたくさん聞けたと嬉しい意見を頂きました。

これからも子ども達の発達に見合った充実した保育を実践できたらと思います。

救急救命ワークショップ

子供の事故対策（予防）と緊急時の対応について

報告者／ワークショップリーダー：永野　茂（熊本市消防局）
橋本　光司（熊本市消防局）

このワークショップでは、全国の病児保育に関係する方々 80名をお迎えするなか、現役の救急隊長である橋本光司による座学と救急救命士４名による実技指導の二部構成にて行った。

まず、座学では「子供の事故の特性について」「事故を起こさないための予防法」の内容にて、子どもが発育して行くなかでの月例ごとにかかわる可能性の高い事故とその対処法について紹介、双方のまとめとして、子どもに対して「ダメダメ」ではなく、子どもの目線における整理整頓や危険排除が必要であることを説明した。

次に、119番への通報に関して、熊本市の現状や通報の要領を紹介、固定電話と携帯電話からの通報を比べた場合、固定電話は現場の特定が早く、携帯電話の

場合は患者の状態が消防に伝えやすいといった双方のメリット、デメリットがあることを解説した。

また、通報者と消防側との会話が成立していないケースも、「〇〇さんはどのような状態ですか？」の問いに「やばいです！」と困った返答があることも紹介した。

一方、実技では、20名×４班に分かれ、各班ごとに救急救命士１名を配置した。

近年の普通救命講習のガイドラインでは、人工呼吸の実施は省かれているものの、当ワークショップへの参加者は、病児保育関係者であることを考慮し、人工呼吸を交えた胸骨圧迫を体験して頂いた。

持ち時間をフルに使って、全員が救急人形のレサシアン（大人）、デイビアン（幼児）を使った応急手当（呼吸の確認→気道確保→人工呼吸→胸骨圧迫）の実技を体験、さらに、ＡＥＤの取り扱いに関しても実技指導した。

最後には、「２歳女児　浴槽に浮いているのを発見」といった想定に対するシュミレーション訓練も行ったが、各班から選抜された実施者は卒なくこなすことができ、ワークショップは無事終了した。

今回、講習に当たった救急隊員たちは、参加者のレベルの高さに感心していた。今後も安全な病児保育の確立を目指して、研鑽を積み重ねられることを祈念致します。

◆ 第25回 全国病児保育研究大会 in 熊本 広報の部屋 ◆

病児保育川柳

たくさんの応募ありがとうございました。
投票の結果、下記の川柳が特賞に選ばれました。

おめでとうございます！

「胃腸炎　なぜなの朝食　ケンタッキー」（大阪　病児保育室 こひつじ）

楽しかったね！懇親会

編集後記

第 25 回全国病児保育研究大会 in くまもとは、856 名の皆様にご参加いただき無事に終了いたしました。ご協力いただきました関係各位に心よりお礼申し上げます。

第 25 回 全国病児保育研究大会 in くまもと 実行委員長　北野　昭人
実行委員会一同

協議会ニュースに関するお問い合わせ先

一般社団法人 全国病児保育協議会 広報委員会

担当：藤　本　　保

〒870-0943 大分市大字片島83-7
大分こども病院
FAX.097－568－2970
E-mail:byouji@oita-kodomo.jp

Printed by